
essais ころみ 2018年12月

2018年12月3日（月） 雨・曇り

師走にしては暖かい雨。明日にいたっては20度超の予報。寒くなるのは週末から。一気に気温が下がるらしい。風邪に要注意。

- 『偶然性と運命』の私的経験則④-気になる(続)

* 『偶然性と運命』（木田元 岩波新書2001年4月）

『数学する人生』の中で「岡潔」が<気分>について書いている。ボカボカした陽気になんとかブラブラ散歩したくなる気分。この気分こそが大事なんだと。

「文化において、生み出す、造り出す働きをするそのはじまりは、ちょうどこういう気分だからだ」。

この箇所を読んだとき、身にしみてよくわかった。もともと自分の気分や気持ちを気にかける方だけど、しだいに重視するようになった。その気になってやったこと、動いたことが、追って何かしら新しい状況や展開をもたらしたからだ。

知人の一人はそれを次のように表現した。「自分が動けば波がおこり、押して返す波についてくるものがある」

なかなかいい例えだと思うけど、自分が動いた方向とはまったく別なところからやってきた展開も、<返す波>にあたるだろうか。

ちょっと違うように思う。その場合は、まもなくやってくる新しい展開の方が<波>をたててくれて、漠然としながらも何かしら動く気になったということではないか。

そうとでも思わないと、説明がつかないと出会いや機会が少なくなる。一個人でもそうなのだから、著名な経営者が晩年に宗教家のようになるのも何となく頷ける。

その気になるということは、「間」にも通じるかもしれない。よく引用する『美学入門』で「中井正一」が語っていること。

「前の時間そのまま流れているのは滞っているのである。切っ捨て捨て脱落して新しく生まれるからこそ生きているのである。「間」というのはこの生きていることを確かめる時間の区切り、切断、響きなのである」。

それほど大事なことだと思う、その気になるというのは。前途を拓くことにつながるだろうし、未知の自分を拓くことになる。

2018年12月3日（月）

泉北まるしえ

泉北アントレプロジェクトの起業ゼミ受講者みなさんの実践。会場がなかなかよいところで、出展者する人にとっても、来場者にとっても、心地よく、たのしくすごせる感。



2018年12月7日（金）

所用で先週に続き奈良へ。再び興福寺を訪れ、今回は中金堂へ入る。





2018年12月8日(度) 今年の「プロ講師になろう塾challenge」は実践的学びあり。

塾が終わるとすぐに実行委員会を編成して、この「チャレンジマルシェ」の準備へ。実際に自分のやりたいことをテスト的にやってみて、それぞれに感じ、考えること多々あったよう。



2018年12月10日（月） 寒い曇り空

ようやく師走感。この冬はじめてロングコート羽織る。

－『偶然性と運命』の私的経験則⑤－みつけられる

*『偶然性と運命』（木田元 岩波新書2001年4月）

出会いの偶然はいくらでもあり得る。ただし、運命に関わる「縁」になるかどうかは別問題。そういう風を感じた一つの経験あり。

遊学中の1989年夏に一ヶ月ほど英国カンタベリーに滞在した。ある週末にロンドンへ出かけた。お目当てのボンドストリートは人が多かった。それをさけて、裏道を通っていた時に目の前のむこうから東洋人らしき女性が歩いてくる。近づくとつれ、見覚えのある顔。

かつてのバイト先でほんの2、3度言葉かわしたことのある人だった。むこうも気づいて、おたがいに「まさか、こんなところで…」と目を丸くし合ったが、大阪心齋橋でばったり会った程度の一瞬の驚きで、そのままあっさりすれ違った。

お互いに一人旅だったから、一緒にお茶でも、ということになってよさそうなものだけど、そうはならなかった。こちらから誘う発想は全くわかなかつたけど、先方から誘われれば、そうしたと思う。

偶然の出会いに意味を持たせるのはどちらからかの働きかけだ。自分がその気になるのは、先に書いたので、よしとして、自分の方は特にその気にならなくても、先方がこちらを気にとめることがある。往々にして、その方が運命に豊富な物語りを綴る。

“わたしが一番守りたいと思っているのは自分の精神性なんだ”と、ちょうど3年前の12月に今さらながら自分に開眼したが、そう考えると、会社員時代の上司が、まだ20代半ばのわたしに、『君は、悪い意味でなくて、〈我がまま〉だよ』と言ったことは的を射ている。

葛藤は相当でも、容易に迎合はしない。それが長所であるし、短所でもある。短所とわかっていても、そこは〈我がまま〉、それもよしとして人生に織り込み、働き、いきる。その様子に気をとめた方、少なからず。my wayを進む姿を、人にみつけてもらったと、今では感じている。

人にみつけられる。これがまた偶然性を生むことになる。

2018年12月14日（金） 晴れて、曇って

冬らしい寒さになっているが、来週はまた少し暖くなるらしい。暖冬は確実で、早めに売りさばこうと、ぶ厚いコート類を早々に値下げする店舗多々。来週土曜は冬至。蜷梅の木には小さな蕾、雪柳にほんの小さな白い花。気にしてみれば、自然に新春の兆しあり。

－『偶然性と運命』の私的経験則⑥－みつけられる（続）

*『偶然性と運命』（木田元 岩波新書2001年4月）

会社員時代より独立時代の方が長くなり、おかげで自分の世界観をもてるようになった。まだこれからも刷新していきだろうが、昨年にはわかに実感したこと一つ。

それは、仕事って、いい仕事になるかならないかはクライアントに依るのではないか、ということ。サービスを提供する者の技量と努力は当然として。

独立した当初から暗黙のうちにそういう感覚はあった。“価値観を共有する相手でないと、自分の想うようなカタチにはならないなあ…”と悟るような出来事にも合った。

昨年出た本に『謙虚なコンサルティング』がある。買うまでもないと思ったので書店と図書館でざっと眺めた。そして感じた。著者の勧めを実践するとすれば、それ相当の度量のあるクライアントでないと。

そこで、われにかえる。そう、度量のあるクライアントにみつけてもらったおかげで、今にいたっているのだと。日経新聞日曜版10月7日付に載っていた「JOHN LOBB」の記事。アトリエ責任者の一言が効いている。

「ジョンロブの靴は顧客との二人三脚で生まれる」

これからはモノやサービスをパーソナルに提供していく時代になっていくから、すべての業に通じる考え方ではないか。

ところで、何らかの機会・偶然によって出会い、どちらか一方、あるいは両者がともに相手に何かをみてとり、その後関係性ができて、早々に信頼関係へと発展した場合、そういう関係性こそ偶然性が生まれるのではないかと思う。そういう思わせる出来事が多々ある。

今もよく憶えているのは、あるクライアントに食事をごちそうになった時のこと。注文したメニューに使う塩を籤で選ぶお店だったが、12種類ぐらいある中から別々に引いたのが、同じ「満月の夜の塩」。

自分たちもびっくりしたが、お店のスタッフはもっと驚いて、不思議そうに言っていた、「これはそうないことですよ」。

他にもいくつもある。ここに書けないこともあるけど、ともあれ、この「私的経験則」をまとめてみようと思うだけの実例が少なくない。あらためて、本当に人生っておもしろい！

2018年12月20日（木） 曇りから雨へ

あさっては冬至。日の出は来年1月の中旬ぐらいまで遅くなり続けるが、日の入りは先日11日から反転している。昨夕などはそれを感じることができた。いっときに比べて少し明るさが残っている。蠟梅の花芽も姿を見せ始めた。クリスマスすぎれば一気に新春。

一 『偶然性と運命』の私的経験則⑦—前向きな諦め

* 『偶然性と運命』（木田元 岩波新書2001年4月）

年3回出しているリーズレター。サイト上に掲載して個別にメールで案内している。年賀状も暑中見舞いもリーズレターに代えて季節の挨拶を届けている。

今回の立冬レターに「800字」のことを書いた。タイトルは『聞いてみて新鮮、知って見て自然』。

わたしの仕事で一番大事なことは相手の相談者やクライアントの本当の想いやその人ならではのものは何か、どこにあるかを知ること。その一つの手立てとして書いてもらうのが800字文。

それ用のフォーマットを作り、使いだしたのは2005年からだったと思う。「大切な人、ぜひ伝えたいと思う人に向けて語るように」、そして、ゴーギャンの絵のタイトルをもじって、「わたしはどこから来たのか、わたしは何者か、わたしはどこへ行くのか」と自問自答するように書きましようかと勧める。

話を聞いて、書いたものを読んで、いつも、しみじみ感じ入る。本当に人には色々な人生がある…。もちろんわたしもその一人で、自他ともにいとおしく感じられる。

そんな感覚を先日読んだ『人体の冒険者たち』（ギャヴィン・フランシス みすず書房2018年）の著者がうまく表現していた。

「医師として働くのは、人間が経験することの総覧を見るようです。（略）クリニックを開業するのは、患者さんたちの身体といっしょに人生の風景を眺める、冒険旅行に出かけるのになぞられるかもしれません」。

わたしの場合は「総覧」とまではいかない。でも「根幹」のあたりにはふれることになる。身近な人に話さないことを話してもらい、書いてもらうことになる。

そうして、その人の人生の風景、まだ見ぬ未来の様子が何となく想像できたりする。それにしても、なんと多くの人が自分以外のことで悩まされていることか…。

よくいわれる、「宿命は変えられないけど運命は変えることができる」、「他人を変えることはできないから、自分を変える」は、象徴的な言い回しではあるけど、個人的にはしっくりこない。

運命は宿命を核にして、自分は他人をスイッチにして多様でダイナミックな現実生活を営んでいる。人それぞれに他者が簡単に立ち入ってはいけないその人固有の〈世界・ワールド〉がある。

2018年12月25日（火） 晴れのクリスマス

冬至がすぎ、今日はクリスマス。よく晴れて、気温は平年並み。でも金曜から寒波に見舞われるらしい。迎春準備で忙しい時になんというタイミング。新年元日は一週間後。

一 『偶然性と運命』の私的経験則⑧—前向きな諦め（続）

* 『偶然性と運命』（木田元 岩波新書2001年4月）

わからないということがわかる。この世にはいろいろな世界があり、人もいろいろな人がいて、すべてを知ることができない、知る由もない。

今では自然にそう考えられるようになった。よかったと思う。なぜなら身の丈を自分なりに量れているということだろうし、他を尊重する下地もそなえていることになろうから。

生きていく上でのシンプルな悟り、前向きな諦め。これは精神的なものであるから、人の目にはっきり見えないけど、運命を司る大事な鍵になっているのではないか。

諦めといっても、〈前向き〉であるから、能動的だ。本当にどうにもならないものは深いきりせず、別の新しい世界を探索して、前途を拓く。自分をいきるアプローチ、運命。

と、書いて、追ってもう少し考えようと思う、12月25日クリスマス。

2018年12月26日（水） しとしと雨

昨日のクリスマス、仕事帰りの人たちが早めに家路についたのか、帰りの地下鉄車内がすごい人だった。中津から乗ってのので座ったが、座ってよかった。梅田から人がどっと入ってきた。こういう時にヘンな人がいるもので、自分は座って悠々とスマホをみているのに、ぎゅうぎゅう詰めになりながら立っている若い男性の荷物があたると、声を出して相手にイチャモン。ヤバい人と察知したのか、立っている人は平身低頭の謝り様。お互い様のはずなのに…。でもこういう悪青年には通じない世の中の感。

一 『偶然性と運命』の私的経験則（終）一動かせる、動く！

* 『偶然性と運命』（木田元 岩波新書2001年4月）

結果的にどういう運命をたどることになるのか、誰も皆ある程度の年齢になると、わかるようでもあり、いやいや、やはりわからない。少しでも何かヒントはないかと人生の大先輩の知人にいろいろ尋ねていたが、その方も今はもう長く床についている。

過去に伺ったたくさんのお話の中で、印象に残っていることがいくつもある。その一つが戦場でのことだ。戦闘の最前線で敵対して打ち合っている時、すぐ隣の戦友に玉があたり戦地に倒れた。自分は免れて帰還した。ほんの数十センチの運命の差。

この差は何か。そう考えると、やはり生かされた命と感じたということだった。「だから、いろいろなことをやっているんだと自分で思いますよ」。本当に公私ともにたくさんのお仕事と趣味を持たれていた。

運命について考える時、どうしても思い出す二人がいる。会社員時代に最初に勤めたところの上司、そして、独立してまもない時期に仕事で知り合った人。自分で自分のことを天才と言う人はそういないと思うが、この二人はそうだった。たしかに天才肌だった。

まさかかつての上司を20数年も後に見かけるとは思わなかった。むこうは気付いていなかったが、こちらは聞き覚えのある靴音、歩く音に、側を通り過ぎた人をふり返った。自慢だったオーダー靴がカン、カン…。足もとから頭に目をうつして、ああ……。今の仕事は一目瞭然。目を疑った。

もう一人の天才は、人づてにその後の孤独な境遇を聞いた。だれにもどうしようもできない状況になったという。何で、そんな…。耳を疑った。

天才肌だけに世の中とのバランスがとりにくくて、そのまま全うすることができなかつたのかもしれない。献身的な理解者、支援者がいればよかつたのだろうけど、そんな幸運は少なからう。

さて、わたしたちの大方は凡人、自分の裁量で自分の才覚をのばして、自分をいきる。だからこそ、自分以外の人があた助けになる。互いに誰かの知に働きかけることになる、意識するしないに関わらず。

じっとしては何も始まらない。ある時点で、ある気になったとしたら、そのままにせず、自分を動かせる、動く。精神的に、物理的に。そうすることで、ものごとに大小の変化や不安定をおこして、しばらく後に偶然と思えることを生む、運命に新しい息吹をあたえる。

すべては自分にかかっているから精進してがんばろうと思うところに〈天のご加護〉があるのではないか。自分しだいと考えるのは、たぶん傲慢。何か別な目にみえない力も借りていると思う方が謙虚。

昔からいきる究極の目的は、運命を終える時、“それなりに自分をいきた！”と思えること。新しい年もまたわたしなりにわたしを動かし、動き、わたしの運命を進むとしよう。

2018年12月29日（土）

大阪城公園

年の瀬、片づけなどの後、自転車で夕暮れ散歩

